

一一ノ六、本尊多聞天再興厨子建立之記

出典 毘沙門天本尊厨子背面の文

解説 平成十六年五月、改築なった毘沙門堂の本尊を安置する厨子を修復した際に背面で発見された建立の記。

なお鈴木桃蹊による厨子見積書（安永二年）、藤堂藩への多聞院修復願（安永七年）を末尾に記しておく。

原文

本尊多聞天再興厨子建立之記

抑当院多聞天王者日本武将楠多聞兵衛正成公

彫刻之守本尊也委由來者山内之室藏別

一卷在之然從元亨之比星霜良久經其上

厨子無之山頂烟霧深尊像及破禎（損か）故、貧道

本尊再興并宮殿建立発志願処、

館命城和兩州之御領分村ニ勸幣有信之

輩而本尊再興及両脇土宮殿造立成就之

功遂了仍以記者也

時安永五丙申年七月吉且

立（筭）置山多聞院現住

快嚴

世話人北立（筭）置

森嶋八五良

同斷 南立（筭）置

大倉善右衛門

師 京室町

鈴木桃蹊

読み下し文

本尊多聞天再興厨子建立の記

抑も当院多聞天王は日本武将、楠多聞兵衛正成公彫刻の守本尊也。委に由来は山内の室藏ママに別ニに一卷（注一）之れ在り。然るに元亨の比従り、星霜（移り変わる年月のこと）良久（かなり久しく）に経たり。其の上厨子之れ無く、山頂の烟霧深く、尊像破損に及ぶ故に、貧道（僧が自分を卑下するという言葉）本尊再興並びに宮殿（厨子）建立の志願を發する処、館命にて城和（注二）兩州のご領分の村々の有信の輩に幣を勧め、本尊再興及び両脇土の宮殿造立の成就の功遂げ了んぬ。仍つて以て記する者也。

時安永五丙申年（一七七六年）七月吉且きつたん

立（筭）置山多聞院現住

快嚴

世話人北立(筭)置

森嶋八五良(注三)

同斷 南立(筭)置

大倉善右衛門(注三)

大仏師 京室町

鈴木桃蹊

注一、笠置寺多聞院毘沙門天王記(延宝九年 一六八一年)を指す。

注二、城和とは山城、大和の略称

注三、森嶋、大倉両家とも笠置浜に於ける木津川水運の船株を有する笠置の有力者

参考資料

その一

毘沙門天安置の厨子建立見積もり 安永二年(一七七三年)六月

解説 毘沙門天安置のための厨子の見積もりを仏師に依頼したもの。この厨子は安永五年七月に完成。平

成十六年五月、毘沙門天堂を改築した際、黒ずんでいた厨子を洗浄した結果、往古の金色の輝きを
取り戻し、背面に本尊多聞天再興厨子建立之記が発見された。

完成品がここにいる上々仕立か極上仕立なのかは判然としない。なおこの資料は後半だけが残存し
ているもので、表題、前半部分などは散逸している。

原文

(前半脱)

金箔屋祢之上^ハ、椀皮色塗^リ如花生船板上下

金欄卷印形等雲間彩色万事念入可申候、

右之経文、絵図之通、少も無相違念入仕立

上々仕立 工科金 拾八両貳歩

極上仕立 工科金 貳拾六両三歩

一右有中外箱、人足ちん等^ハ、右工料之外^ニ而御座候、

安永二年巳(一七七三年)六月

大仏師

笠置山

鈴木桃蹊^印

多聞院様

その二

多聞院破損に付き修復助成願い 安永七戌年(一七七八年)十二月

解説 安永五年七月に完成した多聞院本尊毘沙門天像安置の厨子(宮殿)を納めるための堂の修復。

多聞院が老朽化し、柱板、外側板等すべて破損するという状況にあったが、更に多聞院住持が十年に亘
る病氣入院により破損が進み、屋根瓦も落ち重って非常に危険になったので、今回新しく建立したいとし

て藩に援助を願ったものである。

原文

当院

門之義、先年ヨリ甚及破損^{候而}、柱杵相朽候所、
外側板^ニ而相はき加修覆有之候処、其後、拙僧
入院仕候而より、十箇年^ニも相成候得は、又々右相繕
候処、其外惣而及破損、尤屋根瓦^ニ而落重^リ御座
候得者、風雨之節杯甚危奉存候、依之何卒
更^ニ建立仕、向後永々及破損不申候様^ニ仕度
奉存候得共、自力^ニ難及候^ニ付、今般別帳^ニ入用
金高相認奉願上候、御時節柄之儀、恐多奉存
候得共、御賢察之上御憐憫を以、右願之通
被仰付被為下候^ハ、難有仕合^ニ奉存候、以上

安永七戌年（一七七八年）十二月

笠置山

多聞院

御加判御奉行様